宮沢賢治の童話作品に登場する植物について

平　智・北原裕理・原　理恵子・村岡睦美

山形大学農学部
e-mail : staira@tds1.tr.yamagata-u.ac.jp

Plants Appeared in Kenji Miyazawa's Fairy Tales

Satoshi TAIRA, Yuuri KITAHARA, Rieko HARA and Mutsumi MURAOKA

Faculty of Agriculture, Yamagata University

Keywords : 宮沢賢治，童話，植物，動物，食べ物

子供たちの想像力を育み，価値観の形成にも役立つ効果があるといわれる童話には，私たちに身近な動物や植物が主人公や背景の構成要素としてしばしば登場する。

著者らはこれまでに，国内外の民話や童話，さらに紀行文や文学作品に登場する植物や食べ物と人との関わりついて考察してきた（平ら，2009；2010；2011）。調査の結果，作者が生まれ育った土地や時代背景，さらに生活環境などが作品中に登場する植物や食べ物に少なからぬ影響を与えている事実がうかがわれた。

童話作家としても著名な宮沢賢治は，「銀河鉄道の夜」や「注文の多い料理店」などをはじめとして全部で128編の童話を世に送り出している。その作品中に，多くの動植物が登場することは，作品の表題中に動植物の名前がしばしば使われていることからも推察できる（河合，2003）。

宮沢賢治の童話作品中に登場する動物については，河合雅雄（2003）が『森に還ろう－自然が子どもを強くする－』の中で詳しく分析し，興味深い考察を加えている。一方，植物に関しては，最近石井（2011）が『銀河鉄道の夜』に登場するものについて詳しい紹介と考察を行っているが，童話作品全般に登場する植物や食べ物についてはまだ詳しく知られていない。

本資料・報告は，宮沢賢治の全童話作品中に登場する植物と食べ物をすべて抽出調査し，それらと人との関わりについて考察したものである。

調査方法

ちくま文庫『宮沢賢治全集』（筑摩書房，全10冊，1986）の５巻から８巻に掲載されている童話（劇を含む）全128編（異稿を除く）を調査の対象にした。

まず，作品中に表出するすべての植物と食べ物（植物性のものに限る）を抽出し，それらの種類数と登場回数を数えた。

つぎに，登場した植物を木，草，花，食べ物およびその他に分類するとともに，河合（2003）にならって，それらを「文出」と「単出」に分けた。「文出」とはあるものが物語や文脈の中で重要な役割を占めている場合を指し，「単出」とは文章中に単に単語として表出している場合を指す。

さらに，植物が主人公になっていると判断される作品と植物名が１回も登場しない作品を抽出するとともに，作品の舞台になっている場所（里，里山，奥山，またはそれらの間を往還する設定）についても分類を試みた。

調査結果と考察

全128編中に登場する植物は，全部で282種類で，のべの登場回数は2,135回であった。そのうち，木は101種類で814回，草は65種類で701回，花は43種類で196回，食べ物（植物性のもの）は57種類で286回，その他（草，野原，林など）は16種類で138回であった（第１表）。このように，宮沢賢治の童話作品に最

第１表．宮沢賢治の童話全128作品に登場する植物の種類数と登場回数．

グループ名	種類数	登場回数
木	101	814
草	65	701
食べ物	57	286
花	43	196
その他	16	138
計	282	2,135

2011年10月19日受付.

第2表．宮沢賢治の童話全128作品に登場する木の種類と出現頻度．

順位	木の種数	文出	単出
1	柏	20	27
2	樺（白樺を含む）	18	31
3	柳または楊	13	37
4	「木」*	12	83
5	松（落葉松やとど松を含む）	8	48
6	栗	7	54
7	唐檜	6	3
8	さいかち	5	12
9	銀杏（いてふを含む）	4	0
9	楢（こならを含む）	4	28
	その他	42	145

*：「」は総称を表す．
「文出」とはある植物が物語や文脈の中で重要な役割を占めている場合を指し，「単出」とは文中に単に単語として表出している場合を指す（河合，2003）．

第3表．宮沢賢治の童話全128作品に登場する花の種類と出現頻度．

順位	花の種数	文出	単出
1	鈴蘭	14	4
2	百合	9	5
3	うずのしゅげ	7	0
3	チュウリップ	7	2
3	ひなげし	7	2
6	ダリア	6	1
7	「花」*	5	17
7	マグノリア	5	0
7	ばら（茨や野ばらを含む）	5	25
10	かたくり	3	4
10	りんどう	3	5
	その他	9	28

*：「」は総称を表す．
「文出」とはある植物が物語や文脈の中で重要な役割を占めている場合を指し，「単出」とは文中に単に単語として表出している場合を指す（河合，2003）．

第4表．宮沢賢治の童話全128作品に登場する草の種類と出現頻度．

順位	草の種数	文出	単出
1	つめくさ（赤つめ草を含む）	18	15
2	「草」*	8	174
2	「葉」*	8	15
4	「野原」**	7	163
5	うめばちそう	5	1
5	すすき	5	26
7	蘆または葦	2	7
7	おきなぐさ	2	0
7	「茎」*	2	0
7	「草穂」*	2	3
7	苔	2	24
7	桜草	2	2
7	さるとりいばら	2	1
7	よもぎ	2	1
7	わらび	2	0
7	烏瓜	2	5
	その他	8	158

*：「」は総称を表す．
**：野原は，すすきやつめくさなどの植物とセットで表出していたため植物に含めた．
「文出」とはある植物が物語や文脈の中で重要な役割を占めている場合を指し，「単出」とは文中に単に単語として表出している場合を指す（河合，2003）．

も頻繁に登場する植物は木であることがわかった。

つぎに，木に分類された植物を「文出」の回数が多い順に整理すると，最も多かったのは柏の20回であり，ついで樺の18回であった。柏や樺は，作品中に主人公として登場することが多かったために「文出」としての登場回数が多くなったものと考えられた。

一方，「単出」の回数が多い順に整理すると，最も多かったのは「木」（以下「　」をつけたものは総称を示す）の83回であり，ついで栗の54回であった。「木」や栗は主人公たちが遊んでいる場面の背景に登場することが多かった（第２表）。河合（2003）によると，作品中に登場する動物の種類数は鳥類が1位で最も多かった。鳥類の多くは木の上で生活しているので，鳥類が多く登場することと木が多く登場することは関連しているものと考えられた。

花に分類された植物の中で「文出」の回数が最も多かったのは，鈴蘭の14回，ついで百合の９回であった。鈴蘭や百合は作品中で主人公に準じるものとして登場することが多かった。一方，「単出」の回数が最も多かったのは，ばらの25回，ついで「花」の17回であった（第３表）。なお，ばらは他の花とは異なり，一作品に集中して登場した。

草に分類された植物の中で「文出」の回数が最も多かったのは，つめくさの18回，ついで「草」の８回であった。「単出」の回数が最も多かったのは，「草」の174回，ついで「野原」の163回であった。「草」や「野原」は多くの作品中に風景を描写することばとしてしばしば登場した（第４表）。

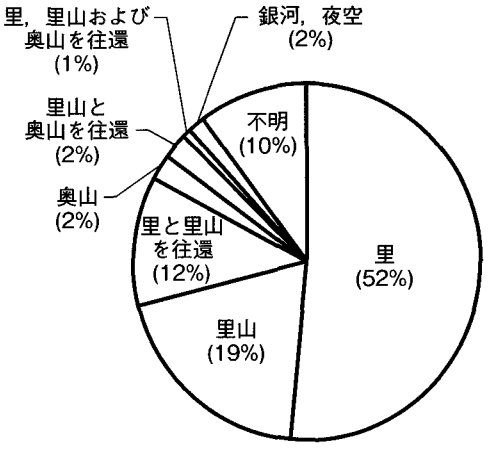
河合（2003）によれば，作品中に登場する動物のうち，「文出」の回数が最も多いのは馬である。宮沢賢治が暮らした岩手県は家畜の飼育や畜産が盛んであり，放牧のための牧場も数多くあったと考えられる。したがって，その作品中にしばしば馬が登場したり，それを取り巻く風景として「草」や「野原」などが数多く描かれることは自然な流れであるといえよう。

食べ物に分類された植物のうち，「文出」の回数が最も多かったのはりんごの13回，ついできのこの７回であった。「単出」の回数が最も多かったのは麦の

第5表．宮沢賢治の童話全128作品に登場する食べ物の種類と出現頻度．

順位	種類	文出	単出
1	りんご	13	10
2	きのこ（椎茸を含む）	7	14
3	どんぐり	6	11
4	トマト	4	4
5	甘藍(赤甘藍や白甘藍を含む)	3	6
5	玉蜀黍（トウモロコシ）	3	14
5	麦（ライ麦を含む）	3	15
8	瓜	2	0
8	馬鈴薯	2	1
	その他	12	113

「文出」とはある植物が物語や文脈の中で重要な役割を占めている場合を指し，「単出」とは文中に単に単語として表出している場合を指す（河合，2003）．



第1図．宮沢賢治の童話全128作品の舞台となっている場所．

15回，ついできのこと玉蜀黍がともに14回であった(第5表)。

つぎに，植物そのものが物語の主人公になっている作品は全部で5編あった。これに対して，植物が作品中に1回も登場しない作品が10編認められた。河合(2003）の報告によると，動物が主人公として登場する作品は35編もあるという。このことから，植物が主人公の作品はそれに比べてかなり少ないことがわかる。ただし，動物の名前が1回も登場しない作品は21編認められ，植物が登場しない作品より多いこともわかった。また，主人公になった動物の種類と登場回数は，狐が5回で最も多く，ついでねずみと蛙がともに3回であった（河合，2003)。これに対し，作品の主人公になっている植物には，銀杏，ダリア，樺の木などがあるが，それらの登場回数はいずれも1回ずつであった。つまり，主人公になる動物は特定の動物が多いのに対して，植物の場合にはそのような傾向は認められなかった。

このように，植物が主人公の作品が動物が主人公の作品より少ないのは，植物は動物と異なり動くことができないので，動くことができる，子供たちがより親しみを持ちやすい動物を主人公にした話が多くなったためかもしれない。

最後に，作品の舞台になっている場所を分類すると，里（民家や集落があるところ）が66作品，里山が25作品，奥山が3作品，さらに，物語の舞台が里から里山あるいは奥山までを往還するものが全部で19作品，想像の世界（銀河や夜空）や設定場所が不明であるものが15作品あった（第1図)。

里は人が生活する場そのものである。また，里山も人が日常生活を営むために燃料や食料の一部を確保するための身近な空間である。宮沢賢治の童話は，そのような私たちの生活に身近な空間を作品の舞台として設定しているケースが多いことがわかった。さらに，そこに登場する動物のみならず，植物についても深い関心をもっており，そのことが結果として，宮沢賢治の作品中に多くの植物が登場する理由の一つになっていると考えられた。

引用文献

石井竹夫．2011．宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』に登場する植物．人植関係学誌．11(1)：21-24.

河合雅雄．2003．森に還ろう－自然が子どもを強くする－．小学館．東京.

平　智・川野美保・山崎雪恵・小岩井優・宮沢喜一．2009．日本民謡やグリムおよびアンデルセン童話に登場する果実や野菜をはじめとする食物について．農業および園芸 84：715-722.

平　智・村岡　翼・渡邊奈穂子・木村正勝・小林恵美・奥山忠洋．2010．藤沢周平の作品に登場する果物と野菜をはじめとする食べ物について．人植関係学誌．10(1)：35-37.

平　智・今井健治・小笠原千晶・菅井元基・匹田直宏・深澤美幸．2011．『おくのほそ道』に登場する動植物について．人植関係学誌．11(1)：17-19.